研究動向

女性史研究の一視角

——Dr. Dorothy McLaren の報告をめぐって

西村貞枝

過ぐる四月十五日、京都の「女性史総合研究会」において、来日中のドロシー・マクラレン氏の『授乳習慣と工業化』[1]と題する報告が行われた。筆者は、十六・十七世紀のイギリス史及び歴史人口学には門外漢であるが、前述研究会の責任者である脇田晴子氏のお推めで、マクラレン氏の報告に対するコメンテーターの役を務めた。その報告は、いろんな観点からみて、極めて意義深いものであった。というのは、たんに報告の内容、伝統的な人口史研究に氏が投げかけた新しい視角の意義といったものにとどまらず、イギリスにおける「女性学」(Women's Studies) の一つの動向を示唆し、かつまたイギリスの婦人研究者の姿勢等をも彷彿させてくれたからである。そこで、氏の報告の紹介という形をとりつつ、同報告のうちに筆者の感じたことを書き連ねたい、さらには、最近の英米の女性史研究の推移のなかに氏の研究を位置づけてみたいと思い、稿を草する次第である。

はじめに、ドロシー・マクラレン氏のこれまでの研究業績について簡単に触れておきたい。氏は、レディング大学にて、「産業革命以前の結婚、妊娠、出産及び乳幼児の死亡について」の研究を続け、二年前に「十七世紀のオックスフォードシャーの人口増加について」という十二万語に及ぶドクター論文を完成した。現在は、社会科学研究協議会から地方史研究者に与えられる研究費を受けて調査研究を続けている。公刊された論文としては、「一六五三年の結婚条令について」[2]があり、また「出産と乳幼児の死亡及び授乳」に関する論文が、近々『メディカル・ヒストリー』誌に掲載される予定とうかがった。

では、次に氏の報告の概要を紹介しよう。③

① Infant Feeding Habits and Industrialization.

② The Marriage Act of 1653: its influence on the parish registers, *Population Studies: a journal of demography*, vol. XXVIII, 1974.

③ 京都での報告は、帰国後、多少手を加えて *Local Population Studies* に投稿されたそうである。

一

マクラレン氏は、前述の如く地方史研究者である。地方史家が滑稽な存在であったのは、遠い昔のことではない。確かに、古文書の一部を切り取ったり、手にしたステッキやこうもり傘で考古学的遺跡から喜々として遺物のかけらを掘り出したりする隠退牧師とその妻の古物蒐集的方法が、ついこの間まで地方史が笑い話と片づけられるのに一役かっていた。ところで、中世史家ヴィノグラドフは地方史の重要性を次のように強調した。「ある特定地域に対象を限定し、しかもその地域の地勢・歴史・慣習の特徴についての詳細に親しく精通し、その地域の発展の跡をできるだけ遡って辿っていくことは、期待できる方法である」と。ヴィノグラドフのこの提言は、「イギリス革命の起源」や「産業革命の起源」についても、方法的には同様に有効である。

さて、氏の調査研究は、十七世紀後半、産業革命の起源に関わっている。歴史の標準的教科書にみられる前工業化社会についての一般化に、氏は懐疑の念を抱いた。たとえば「乳幼児死亡率は、前工業化時代のイギリスにおいて極めて高かった」とか「多くの子供が生まれたが、悲惨な生活に耐えて生き残った者はほとんどいなかった」とか。① が、完全な貧困という一般的パターンは、十七世紀後半の南オックスフォードシャーにおいて広くゆきわたった状況ではなかった。このことを多くの人々に納得させるには、量的に証明しなければならない。折りしも、フランスのルイ・アンリやイギリスのアンソニー・リグリーが家族復元法を完成した。農民が遺言状や証文を後世に残さなかったとしても、今や残存する教区簿冊から農民の人口動態を引き出し、その家族を復元することが可能となったのである。

氏は、南オックスフォードシャーのテムズ河畔にある二つの教区（キャヴァシャムとメイプルダーラム）から七千例を、さらに西サマセットシャーの教区からは一万四千例を抽出した。両地域から得られたパターンは非常によく似ている。その調査結果は、社会的ピラミッドの上層と下層の間には明らかな相違があることを示した。すなわち、ジェントリーと貴族階層においては、驚くべき高出産率及び高い乳幼児死亡率がみられるが、農民（yeomen 及び husbandmen を一括）と職人層では、完全家族の平均的出

生数は六人を少し上回る程度である。ステュアート期の南オックスフォードシャーと西サマセットシャーの教区の実例において、一人の女性が十八人以上の子供を出産するといった多産さは、常にジェントリーと貴族階層に限られていた。農民は、大体三年という出生間隔をおいて四―六人の健康な子供を生んだ。

イギリスの産業革命に関して、経済的、社会的、知的等々の起源に先立って、デモグラフィックな起源論はもっとも重要な分析対象である。マルサスの人口動態についての予言が正しかったとすれば、「産業革命」がいかにして起こり得たのか理解できない。リグリーの言うように、「大多数の人口における低く停滞した実収入は、工業化の始動に必要なあのような需要の大波動の襲来を始めから不可能にしたはず」である。[2] 十四世紀末に始まった人口のエラティックな増加は、十七世紀中頃にぴたりと止まった。これについて疫病の蔓延や内乱での死亡、植民地への移住といったファクターが云々されてきた。[3] が、これらはいずれも、工業化を準備した農業生産性の改善にはなんの寄与もしなかった。イギリス産業革命を準備したのは、一六五〇―一七五〇年の時期に進行した人口の剪定（selective pruning, 自然淘汰とも言い換えられよう）であると氏は断言する。些か粗雑に聞えるかもしれないが、田園地域において適当な数の健康な子供が育てられ、強健な労働力として農業と工業に送られた。

では、この「人口の刈り込み」はどのようにして進行したのか。氏はここで、社会の上下両階層における授乳習慣の相違に着目する。授乳（lactation）は、人口動態に影響を及ぼすと考え得るさまざまの要因のなかで、未だほとんど調査されていないものであり、しかもこれは根本的に出生率と乳幼児死亡率に影響を及ぼすものである。授乳という行為（breast-feeding）が、母体の卵巣の機能を停止させる、もしくは弱めるということは、石器時代以来民衆によって知られていた妊娠に対する生物学上の安全弁であった。[4] しかるに、このことは十七世紀イギリスのほとんどのジェントルウーマンによっては無視されていた。社会の上層における男子相続人の減少についての理由をこれ以上探し求める必要はない。子供たちは生まれるとほとんどすぐに死んで、母親は次の妊娠に対する免疫性を直ちに失った。

ここで二つの問いを提起して、前述の内容を裏づけよう。第一に、授乳期間を引き延ばすことは、一般的に受胎防止にどの程度効果的であるのか。第二には、母乳による子育ての功罪について、十七世紀のイギリスにおいてどのような証拠史料が残っているのか。第一の問いについては、未だ決定的なことは言われていないとしても、医学界の少なからずのオーソリティーが肯定的見解を

表明している。一、二の例を挙げるだけで十分であろう。「工業化、都市化及び栄養状態の改善と共に、われわれは重要な経済的資源、すなわち母乳を廃棄している。妊娠が生理現象である限り、授乳は母体に貯蔵された精力を除去する手段であるのみならず、出生間隔を決定するためのより適切な手段を、両親が選び取ることが可能になるまでの暫定的な避妊方法でもあるのだから、授乳を優先させることは至上命令であるだろう[5]」。「母乳保育から牛乳保育への転換は人口爆発に驚くほど貢献している。（中略）母乳保育を止めると、プロラクティン（脳下垂体前葉ホルモン）の数値が低下してすぐに妊娠する[6]」。その他母乳と人口成長の関係を指摘する臨床例はいろいろある。なるほど卵巣の機能に対する授乳の生理学はまだ十分に解明されていないとはいえ、前工業化社会において授乳期間の引き延ばしは、出産回数をコントロールするほとんど唯一の手段であったと言うことはできよう。

第二の問いに進もう。十七世紀のイギリスに授乳に関してどの程度の質的証拠史料があるだろうか。当時の代表的な質的史料といえば、もちろん日記類である。ところが、十七世紀のイギリスの上層の女性も農民女性もおしなべて、出産とか育児については減多に言及していない[7]。史料は数少ないものの、ともかく氏が渉猟した限りでは、当該の時期において上流階級の女性で自身の子供に授乳した者の実例は、たった一人であった[8]。時代をエリザベス朝まで遡ってみても、授乳という慣行の功罪については、なおも断片的な史料しか見つからない。はっきりしていることは、一般的にジェントルウーマンは、母乳保育の負担から解放されて、生まれた子供を里親（suckling house の乳母）に預けて何か月も子供に会わないという状況が普通であったということである[9]。貴族階級のほとんど全ての日記や家系図は、多少の差はあれ、現代の人々なら「ミニマム・ケア」と考えるような幼児の取り扱いについての不注意、無知、無関心で充ちあふれている。貴族の乳幼児の被った受難の数々は枚挙にいとまがない[10]。周知のように、アン女王は十七人の子供を出産したが、その一人として大人になるまで生き延びなかった。しかも十二人は生後すぐに亡くなった。これについては、相容れないリーサス因子の結合とか、失天的梅毒などで簡単に説明する人もいる。が、氏は、アン女王が自ら子供の一人にでも授乳していたなら、ジョージ王の治世はなかったかもしれないと示唆している。ともかく、自分の子供に授乳した上流階級の女性を見つけるのはむずかしい。自ら授乳しない場合にどのような保育形態をとったかはまだ不明な点が多いが、彼女らの間には授乳が母体にとってすぐにまた妊娠しないための安全弁であるという考え方はなかった。

では農民層の女性の場合はどうなのか。ここでは数量分析的史料に頼らざるを得ない。南オックスフォードシャーから引き出されるデータでは、大体三年の出生間隔で六人ぐらいの出生数というのが平均的である。しかも幼児死亡率は目立って低い。一六三六―一七〇六年の時期のキャヴァシャム教区とメイプルダーラム教区の乳幼児死亡率を千分比で表わすと、それぞれ一一四・七と一一一・八である。[17] 当時の農村女性は、卵巣の機能と授乳とのメカニズムについては無知であったけれども、授乳していると妊娠しないということに明らかに気がついていたといえる。堕胎や幼児殺しがあったかもしれないと考える向きもあろう。が、キリスト教的道徳の力は極めて支配的であったし、農民嬰児の大規模な間引きがありえたはずはない。また、十七世紀の農村女性の主たる労働の場は、畑や穀物小屋、醸造場、牛小屋などで、産業革命後の労働の場である工場、炭鉱、ワークショップとちがって、乳児に母乳を与えることが可能であったという点にも留意したい。

さて、「政治算術」で有名なウィリアム・ペティーは、十七世紀の人口に関連してはっきりと「長期間授乳は、受胎を妨げる」と書いている。貴族の女性は、彼のこの言葉を聞くことができたであろう。しかし農民女性とちがって、ジェントルウーマンは授乳という野蛮な習慣は品が悪い、社会的文化的地位にふさわしくないという文明のワナに囚われていた。しかもそのうえ、男子相続人を生まねばならないというさし迫った必要性があり、両方の板挟みになっていた。こうして彼女らの間には高い出生率及び乳幼児死亡率が現出した。他方、ほとんどの農民女性はウィリアム・ペティーの言葉など読んだことも耳にしたこともなかったにちがいない。しかし、彼女らは授乳行為によって適度な出産回数と低い幼児死亡率を維持できた。かくして、十七世紀の南オックスフォードシャーの農民は、改良された農業と新興の工業にとって必要な労働力となるべき、健康的でしかも適度な数の子供たちを供給したのである。

最後に、産業革命以後の授乳習慣について一言触れておく。産業上の変化は、下層階級の母親を家庭外の労働に駆り立てた。前にも述べたが、工場や炭鉱や都市の苦汗労役場では、母親が乳児に授乳することはできなかった。しかも十九世紀になると、授乳を長びかせると母体にとっても乳児にとっても悪いという見解が、労働女性の間に絶えず宣伝された。授乳習慣のこのような推移が、ヴィクトリア時代の工場労働に従事した母親たちの間に、あまりにも高い出産率と乳幼児死亡率が現出した原因の一つである。

以上がマクラレン氏の報告の要約であるが、口頭発表を縮めながらの文章化は容易な作業でなく、氏の研究の本領を十分に伝え

得たかどうか、枝葉ならぬ部分を省略してしまったのではないかと懸念するが、その点は御海容を乞いたい。

① たとえば、L. A. Clarkson, *The Pre-industrial Economy in England 1500–1950*, 1971 など。

② E. A. Wrigley, Troisième Conference Internationale d'Histoire Economique, Munich 1965, p. 232.

③ Ed. J. Thirsk and J. P. Cooper, *Seventeenth Century Economic Documents*, 1972, pp. 59–67.

④ *World Archaeology*, 4. 1972, pp. 205, 222.

⑤ John E. Tyson, *Medical Clinics of North America*, 61, Jan. 1977, pp. 153–163.

⑥ John Knodel, Breast Feeding and Population Growth, *Science*, 198, Dec. 1977, pp. 1111–1115.

⑦ ここで一言しておきたいが、日記などを遺さなかった農民女性は、それらを書くだけの時間的余裕がなかったのであって、必ずしも文盲であったのではない。彼女たちの書き残したものといえば、マーマレードの作り方とか、「狂犬に噛まれた時」やペスト、結核、鼻血、歯痛、痛風、疱瘡などの治療法であった。

⑧ その女性は、クロムウェル支持の議会派の一員の妻、Lady Elizabeth Willoughby である。

⑨ 例えば、ed. Mary Carbery, *Mrs. Elizabeth Freke, Her Diary, 1671–1714*, 1913, p. 25. その他、Bulstrode Whitelocke の未公刊の日記など。

⑩ Lawrence Stone も、貴族の婦人たちには、子育ての能力がなかったと述べている。

⑪ リグリーのコリトン教区での数値一一八―一四七よりやや低い。

二

次に、「授乳習慣の社会史的意義」とも言い換え得る氏の報告について若干論じてみたい。

まず第一に氏の採った方法について。家族復元法に関するメリット、デメリットは近年いろいろ指摘されており、ここで改めて述べるまでもない。[1] 氏の今回の報告は、第一義的に南オックスフォードシャーの教区簿冊から入手したデータによる家族復元法に依ってはいるが、それを万能の武器としているのではなく、この類いの史料しか得られない場合、「何もやらないよりはやってみなくては」という氏の言葉に、家族復元法に対するそれなりの批判の姿勢が窺えた。それゆえ、氏が分析のバックボーンを量的証拠史料（教区簿冊）と質的証拠史料（ジェントルウーマンの日記の断片）の双方に依拠せしめようとしたのが、授乳習慣の社会階層別相違という社会史的着眼点であったと言える。ただ、氏の統計的史料が、イギリス全体を見通せるような、典型的な人口集団に基づいているのかどうかがさだかでないので、その点で、従来の歴史解釈に新局面を拓けるかどうかの判断も留保せざるを得ない。が、人口史研究に社会史的視角を持ち込んだ点を十分に評価できよう。

第二に氏の分析結果とその解釈について。出生率さらには乳幼

児死亡率までが、授乳という社会慣習の階層別相違、授乳期間の長さに影響されたであろうという氏の解釈は極めて興味深い。最初、貴族・ジェントリー層の乳幼児死亡率の法外な高さという事実は、非常に奇異に感じられた。というのは、幼児に限定しない全体的な死亡率については、富裕であれば飢饉や疫病の流行の折にも比較的に栄養状態が良いわけだから、死を免れそうであり、したがって死亡率は社会階層が下がるにつれて上昇するという大雑把な一般化ができそうだからである。[2] 出生率及び乳幼児死亡率が貴族・ジェントリー層において高いことを、教区簿冊を史料として実証したこと、さらにその現象を授乳行為の放棄（そこにミニマム・ケアの不履行という問題も入る）という点に求めたことは、氏の報告の大きなメリットであろう。ただ、氏の分析結果の解釈が専ら授乳習慣の社会史的意義に矮小化されている観がする。前工業化社会の出生率及び乳幼児死亡率を左右したと考え得る要素（変数）は他にもいくつかありそうである。出生率に関していえば、たとえばリグリーは「家族規模の意識的制限が全くない状態では（つまり出生数が個々の選択の問題でない場合）、最終的な一家族当たりの子供数は、大いに結婚年齢の関数となる」と述べている。[3] 結婚年齢は、もちろん女性の側のそれである。しかもこの結婚年齢は、一般化は困難にしても、授乳習慣と同様、社会の上層と下層の間で相異なる傾向が認められるようである。相違というのは、それぞれの階層の男性が妻として娶りたいと望む女性の理想像における相違である。十六・十七世紀の具体的史料に即してのコメントではないので、推測の域を出ないが、妻に遊惰な生活をさせるだけの富を所有する男性は、どちらかと言えば若い女性を妻として求め、他方農村社会の相対的に厳しい状況にある男性が結婚を考える場合には、家事や野良仕事に通じた女性（時としては自分名義で土地を所有する年上の未亡人）を望ましいと考えたのではなかろうか。[4] 女性の結婚年齢は、社会的階梯を昇るにつれて低くなり、同時に、出生率は逆に高くなったということは、中世の農村社会研究者（たとえば、G. C. Homans や R. H. Hilton など）が繰り返し語っているところである。実際には、授乳習慣と結婚年齢のどちらの変数が、出生率により深い影響を及ぼしたか、その点は筆者には確定的なことは言えない。[5] 乳幼児死亡率に関しては、他の変数を今思いつかないが、母乳を与えないということだけでは論証が十分でないように思われる。同時に起こった二つの社会現象を因果的に結びつけるには、その他の考え得る諸要素の相対的重さを考慮に入れる必要があろう。

さらに、プロラクティン値と受胎との関係を論証するためには、まだデータ不足の観がするが、この点は生理学の部門の成果に待

たねばならない。

第三に氏の報告の結論部分である授乳習慣と工業化について。氏は前述の分析と推定をさらに推しすすめて、健康な農村人口の増大を産業革命の人的資源の準備に結びつけた。産業革命の労働力の創出については、囲い込み運動によって農民が土地から一掃された結果であるという教科書的説明はすでに陳腐となっている。その創出される農民の労働力が、極めて健康で量的にほどよいものであったということを、氏が授乳習慣という観点から跡づけたところに非常に新鮮な感じを受けた。しかし、階層別の授乳習慣の相違が、たとえ氏の調査した教区にとどまらずイングランド南部の一般的現象であったとしても、それが工業化の起源論とアプリオリに結びつくものかどうか。強健な労働力が工業化のために残されたという結論を引き出すことにおいては、氏が授乳習慣の相違を論ずるために駆使した量的、質的いずれの証拠史料によっても傍証されていないという点が問題であるように思える。[6] この点の分析は、統計的史料に依拠するしかないと思うが、これら田園地域の健康な子供たちが、のちにロンドン及びその他の新興工業地域のいずれかの教区で埋葬されたということを証明するデータが集められて初めて、氏の調査と推論のギャップを埋めることができるのかもしれない。

① 川北　稔「社会史の方法」、樺山紘一編『歴史学』日本評論社、昭和五二年、六九―七一ページ参照。

② これはあくまでも一般化であって、内乱時の籠城状態の不衛生な環境など個々の特定のケースを考慮に入れない場合のことである。

③ E. A. Wrigley, *Population and History*, 1969. 邦訳、速水　融訳『人口と歴史』平凡社、昭和四六年、二〇〇ページ。

④ D. M. Stenton, *The English Woman in History*, 1957, chap. III, IV を参照。

⑤ マクラレン氏は、この疑問に対しては、「南オックスフォードシャーの教区簿冊にみる限りは、貴族・ジェントリー層の女性の若年結婚と農民女性の後年結婚という推定上の相違は特徴的に現われてこないし、また結婚年齢と出生率とのかかわり合いも当該地域の統計結果からは傍証することができない」と答えられた。

⑥ 農村人口の増大が工場労働力と直接に結びつくかという問題についての論証の不十分さは、この問題がきわめて重要なだけに、短い報告では問題提起的にしか言えなかったためと思われる。

三

マクラレン氏の研究は、これまで述べてきたことでわかるように、すぐれてインターディシプリナリーな性格を有している。地方史研究者、人口史家でありながら、氏はたえず生理学や医学史の領域と接触を続けて、その道の成果を自らの歴史研究のなかに投入しているように見受けられる。さらに、氏自身、「女性学」とか女性史という言葉は一度も口にしていないが、筆者には、氏の研究はイギリスにおける「女性学」の一つの動向を反映するも

のと受けとってもよいように思われる。それゆえ、ここで、筆者の専門領域である十九世紀イギリスについての「女性学」的女性史研究の最近の動向を、マクラレン氏の研究との関わりにおいて紹介しておきたい。

「女性学」については、最近ジャーナリスティックな方面でいろいろ紹介されているので、ここでは簡単に触れておくだけで十分であろう。「女性学」という学際的なプログラムは、一九六〇年代後半から七〇年代前半のアメリカにおけるウーマン・リブの運動を背景にして生まれた新しい学問の分野である。女性が社会活動のあらゆる分野から組織的にしめ出されてきたという歴史的差別の認識、そしてその差別を思想的に正当化し保護、維持してきた宗教や哲学、社会思想の分析、そして女性の歴史や文明への貢献を完全に無視してきた従来の学問への女性の視点からの批判及びその改正等が、「女性学」発生の根本にある思想である。したがって「女性学」は、従来の学問への批判から始まり、歴史の書き換え、研究のやり直しをあらゆる分野において要求するものであり、たんに新しい研究分野の拡大にとどまらず、必然的に現代学問の革命という性格を担ってくる。また、従来の学問の境界にとらわれないところから、学際的性格をその特徴とする。[1] そして「女性学」は、その革命的性格のゆえに、強力な保守的反論を浴び、さまざまの内的外的な障害と闘いながら、時には行き詰まりをみせながらも、今日までその歩みを続けてきた。現在、アメリカのほとんどの大学が、「女性学」の講座のもとにカリキュラムを組んでいる。[2] 今、七〇年代の研究成果が出版物となって続出しているので、最近の新刊書案内を一瞥しただけでも、「女性」をテーマとする研究書や論文がいかに多産であるかに気づかれることと思う。このように「女性学」はアメリカ的なものであるが、この傾向はアメリカだけにとどまらず、「女性学」というアメリカ起源の言葉をあまり用いないイギリスにおいてもほぼ同様に認めることができる。[3]

さて、「女性学」の発生、発展によって刺激され進められてきた歴史的研究には、新しい顕著な傾向が認められる。その動向を、とりわけ七〇年代以降激的な出版物の増加をきたしている「ヴィクトリア時代の女性」の研究において明らかにしたい。ただし、この分野の研究動向全般を論じるとすれば、紙数の制限をはるかに越えてしまうので、研究対象の変化という問題に絞ることにする。[4]

まず、簡単に言ってしまえば、十九世紀フェミニズムの運動史的性格[5]のものから、最近はヴィクトリア時代の女性の諸問題を学際的に取り上げる方向へと推移しているということである。従来

の「ヴィクトリア時代の女性」をテーマとする歴史的研究の伝統的、スタンダードな主題のなかには、第一に女権獲得運動（フェミニズム運動史研究）、その内容をもう少し細かく言えば、女子教育改革、雇用領域の拡大、既婚女性の財産権や離婚をめぐる法律改正、「婦人参政権」等々があり、第二には、「社会悪」（売春）といった社会問題や個人的な博愛主義運動からソーシャル・ワークへの移行といった問題が目立っていた。[6] これら伝統的領域ですらまだ十分に研究され尽くしたとは（とくにわが国では）とても言えないのであるが、最近、ヴィクトリア時代の女性の社会的地位の変化についての英米の研究に新しいカテゴリーが顕著に認められるようになった。それらのほとんどは、これまで歴史家によって比較的に注目されていない諸問題に念入りに焦点を合わせている。二、三そのカテゴリーを挙げてみよう。㈠ 結婚と家族（家庭における関係と役割）、㈡ 疾病と健康管理、㈢ 女性と科学（女性の本質や精神についての自然科学及び社会科学上の見解など）、㈣ 女性の諸組織等々。[7] 前述した伝統的主題と対比させると、パブリックな諸問題とプライベートな諸問題という大雑把な区別ができよう。プライベートとは言え、それは決して社会全体との関連を見失わない限りにおいてであり、社会的関係や社会的解釈から分離したような個人的な部分をほじくり出すという意味ではない。

さて、マクラレン氏の研究と関連を有すると思える前述の㈡のカテゴリーの研究動向について若干述べておきたい。ヴィクトリア時代の女性の疾病、健康及び健康管理の問題の考察には二つのアプローチが考えられる。一つは、社会環境上のアプローチ、もう一つは医学・生理学・心理学上のアプローチである。前者のアプローチの主たる関心は、社会経済的集団の一員たる女性と、彼女の置かれた環境における、彼女の健康に影響を及ぼす諸要素との相互作用にある。[8] 後者についての主要な関心は、その当時の女性に開かれていた健康管理のなかに、女性の特殊の生理学上、心理学上の特徴や問題がどの程度投影されていたかにある。[9] アメリカの女性についての健康及び健康管理の問題の詳細な歴史的研究は随分進んでいるが、[10] イギリスの場合はやっと注目されかけたというにすぎない。概して肉体上の問題というものは、歴史的考察の対象として本格的に取り上げられてこなかったが、この種の研究が進めば、これらが女性の社会的地位の問題と無関係でないことが示されよう。また教育面、雇用領域、選挙権など女性に阻まれた機会を追求するフェミニズムの運動を招来せしめた当時の社会的姿勢や政策といったものとの関連性も明らかになってくるにちがいない。

前述の社会環境上のアプローチに話を戻そう。このアプローチは、十九世紀イギリス社会史の特殊研究としてすでにかなり分析が進められている。都市の衛生条件、住宅事情、幼児・児童の福祉、それに公衆衛生の諸々の政策、医療等々の諸問題がそれである。[11] また死亡率の問題も、十九世紀については、階級差や性差の点からいろいろと論じられている。[12] いずれの問題にしても、家庭における女性にとりわけ関わっていたことは疑いない。したがって便宜的に別々の範疇分けをしたが、(一)の「家族史と女性」のカテゴリーと重なり合う部分も多い。[13]

医学上のコンテクストでは、とくに小児科学、産科学、婦人科医学、医学心理学などの理論及び技術の発達が、ヴィクトリア時代については注目されてきている。[14]

このように、明らかに「女性学」の影響を受けた歴史的研究は、第一義的に十九・二十世紀の研究に集中しているが、今後次第に十六・十七世紀にも波及していくことであろう。そうすれば、前述のマクラレン氏の報告において、まだ十分に解明されていなかった貴族・ジェントリー層の、授乳保育をやらない場合の保育形態や健康管理の問題などが、社会史的視角からさらに一層明らかにされるかもしれない。ともあれ、マクラレン氏の研究テーマの設定は、すぐれて「女性学」的であり、これまで述べてきたような近年の「女性学」によって刺激され進められてきた歴史的研究の動向を反映していると言っても過言ではないだろう。

① たとえば、ニューヨークのクィーンズ・カレッジで編集されている雑誌『女性学』*Women's Studies: an interdisciplinary journal* は、その刊行の意図を「本誌は、文学、歴史、芸術、社会学、法律、政治学、経済学、人類学及びその他諸科学の分野における女性に関する研究及び批評を発表するためのフォーラムを提供する」と述べている。ちなみに、その他の代表的な女性学の雑誌には *Feminist Studies* や *Signs: journal of women in culture and society* などがある。

② 日本でも、お茶の水女子大学を始め、いくつかの大学にその影響は波及しつつある。

③ イギリスでは、Sheila Rowbotham らを中心とするフェミニスト歴史家のグループが活躍している。ロンドンの Women's Research and Resources Centre がイギリスの女性学のセンターとして機能しているようである。

④ 「ヴィクトリア時代の女性」の研究動向について、本稿で触れた問題及び触れなかった諸問題に関して参考となる文献を以下に列挙しておく。S. Barbara Kanner, The Women of England in a Century of Social Change, 1815-1914: a select bibliography, Ed. Martha Vicinus, *Suffer and Be Still: women in the Victorian age*, 1972; Martha Vicinus, New Trends in the Study of the Victorian Woman, 及び S. Barbara Kanner, The Women of England in a Century of Social Change, 1815-1914: a select bibliography, Part II, Ed. Martha Vicinus, *A Widening Sphere: changing roles of Victorian women*, 1977; Jill Roe, Modernisation and Sexism: recent writings on Victorian women, *Victorian Studies*, Vol. XX, n. 2,

1977.

⑤ この方面でも、七〇年代以前はフェミニストの思想や活動の歴史的著述は、おおむねパルチザン的構えを帯びて、抑圧から解放にいたる過程を総合的一般的に、しかもナラティブに展開詳述するというものが多かったが、最近は、フェミニズムの社会的背景に深く切り込んだより系統だった分析が行われている。

⑥ O. R. McGregor, The Social Position of Women in England, 1850–1914: a bibliography, *The British Journal of Sociology*, Vol. 6, 1955 及び前述の S. B. Kanner のビブリオグラフィー・パートIを参照。

⑦ Kanner のビブリオグラフィー・パートIIを参照。

⑧ これについては、女性に直接焦点をあてた研究は今のところ存在しない。

⑨ この分野は、カテゴリーの㈢と密接に係わり合う。ちなみに、今年の九月二九日に開催される *Past and Present* の年次大会のアナウンスメントによれば、同カンファランスの共通テーマが、The Roots of Sociobiology となっている。イギリスの歴史学会が Sociobiology を本気で取り上げるのは今回が初めてのことであろう。

⑩ S. B. Kanner, Part II, p. 232.

⑪ Ed. John Woodward and David Richards, *Health Care and Popular Medicine in Nineteenth Century England: essays in the social history of medicine*, 1977.

⑫ Sheila Ryan Johansson, Sex and Death in Victorian England: an examination of age- and sex-specific death rates, 1840–1910, Ed. Martha Vicinus, *A Widening Sphere*, chap. 8 及び Paul Tompson, *The Edwardians: the remaking of British society*, 1975, p. 18.

⑬ 家族史は、今や英米において歴史的調査が盛んに行われる領域となっている。そして、そこにおいては、従来の書かれた歴史一般が男性中心で女性を外周りに置いてきたのに反して、女性はむしろ男性よりも重く歴史に関わるといってよいであろう。文献については、S. B. Kanner, Part II, pp. 205–231 を参照。

⑭ とくに、十九世紀は婦人科医学の「最大の世紀」と言われ、その文献は膨大なものがある。研究書で代表的なものを一冊あげておく。J. M. Munro Kerr, R. W. Johnstone and M. Phillips, *Historical Research of British Obstetrics and Gynaecology*, 1954.

四

最後に、「研究動向」と銘うった本稿には場違いと受けとられるかもしれないが、マクラレン氏に垣間見たイギリスの婦人研究者の一つの姿勢について特記しておきたい。

氏は一九二三年に生まれ、戦争中に若い時を過ごし、高校を卒業後すぐに就職した。イギリスでも当時は、女性の大学進学は「月世界旅行」に行くのと同様にむずかしかったようである。一九四四年に結婚して以来二十年間、家事と育児に専念した。長男、長女が成人し、末娘が学齢に達してから、それまで押し殺してきた学究心を満足させるべく勉強を始める決心をした。四十五歳のときである。教員養成学校で大学進学の資格を取り、レディング大学に入学、文学士の論文を書いて大学院進学、そして二年前に Ph. D. を取得したのである。その間に家族の暖かい励ましがあった

ろうことは想像に難くない。イギリスでは、このように女性が四十歳を過ぎてから大学に入り直して再び勉強を続けるということが非常に盛んなようである。最近、ケンブリッジ大学には中高年の女子学生を優先入学させるカレッジが創設された。日本において、婦人研究者問題が旺んに論議される昨今、いわば「おばあちゃん博士」としての氏の経歴は、日本の婦人研究者にも大きな励みとなるにちがいない。氏のユニークなテーマ設定にしても、人口史家の多くは男性であるから、女性たる彼女にしてはじめて発想しえたテーマであろう。ただ、このようなテーマを学位論文に完成させていけたイギリスの学究上の男女平等の雰囲気は、男性社会に進出せんとするアメリカの幾分ミリタントな「女性学」に劣らず、婦人研究者を勇気づけてくれるものがある。もちろん、周知のように、イギリスにはアイリン・パウアー、ドリス・メアリ・ステントン、ヘレン・キャム、エレオノーラ・ケアラス＝ウィルソン、ドロシー・ホワイトロック、ジョーン・サースク、ポーリーヌ・グレッグ、ドロシー・マーシャル、アイヴィー・ピンチベックなど、著名な女性の歴史家の名前を挙げていけば十指に余る。彼女たちは、間違いなくイギリスの歴史学界の最高峰である。これまでその最高峰だけが日本に紹介されてきたが、マクラレン氏との出会いは、女性歴史研究者の裾野の広さを知らされた点でも大きな意義があったと考える。

付　記

マクラレン氏の報告において、都立大の三好洋子先生が通訳の任に当たられた。さらに、本稿作成にあたって、先生から多くの御教示を頂いたことに対し、謹んでここに感謝の意を表明いたします。

（京都大学文学部助手　　）